

# 現代体育教授学の構想と展望(I)

— 吉本 均教授を追って —

松岡 重信

(1987年9月10日受理)

Imaginations and Trend on Physical Education Didactics (I)  
— Pursuing Prof. Hitoshi Yoshimoto —

Shigenobu MATSUOKA

Prof. Hitoshi Yoshimoto have been looked up great theorist modern general didactics in Japan. And he retired from Hiroshima University in this year (1987). At this point, I have some and unconcrete imaginations or trends about teaching-learning theories about health and physical education. Already some researcher study his theory and pursue Hitoshi Yoshimoto in the domain of health and physical education.

In this paper, I select and study about Kihaku Saitho, Takeji Hayashi, Atsushi Kobayashi and Kazuhisa Kobayashi, and compare their studying attitudes. They study own practice in common with own theory, but all their theory and practice have not all universality. On my viewpoint, new practice and theory will be constructive as swimming program.

## I. はじめに

筆者は、数年前『授業の最適化』をめざした論理を数編本紀要に投稿してきた。<sup>1)2)</sup>しかし、結局のところ、自から学習し、実践した範囲を一步も脱脚することが出来ず、また最適化という本来多次元の中で評価パラメータが設定されるべきところに整合性をもたせることが出来ず、この構想を一時諦めていた。何故なら教師の経験主義に、この最適化構想を埋没させてしまう可能性が大であったことも反省材料としてあったからでもある。経験することの重要性に対する認識自体は今もそれ程変化していないが、今一步構想を進めてみる一つの契機があった。吉本均教授の退官である。

彼は、わが国現代教授学の最高峰にいる方と筆者自身は理解している。他にも柴田義松はじめ現代一般教授学に関して、すばらしい活動を続けている教授学者を知らない訳ではないが、わが国の教育現状への対応性を発表論文の質量、それらを再構成しての文筆活動、さらには彼の指導性は、多くの研究校においても、また直接彼の教え子にあたる多くの人々の活動の中にも見い出せる。

筆者自身とのかすかな彼との関係についていえば、大学院時代に講義をうけたこと、彼が体育関連の雑誌に発表した論文、あるいは『現代教育科学』誌に発表した論文や何冊かのシリーズ本や単行本に目を通している程度で、直属の弟子という訳けでもないし、彼の文章に一々傾倒しまっている訳けでもない。それでいながら、これまでの筆者の仕事のかかなりの部分は彼の文章を手がかりにしている。彼の発想を参考にしている。<sup>3)</sup>

いずれにせよ、本紀要論文において表記のタイトルを設定した最大の理由は、吉本が定年退官で広島大学を去ったことにあるし、体育教育学の立場から彼に追随し、いつの日か彼をおいこしてやろうとする者が何名かいたところで、大して彼に迷惑をかけることにはなるまいと考えている。具体的には、小林一久がこの道に入って多くの共同の仕事をしているし、徳永隆治も、そのまた弟子として実践の立場から意志を表明しておられるともうけとれる。<sup>4)</sup>

本論においては、筆者なりの『現代体育教授学』をめざす者として、吉本とほぼ同時代に生きて活動した人々のうち、筆者とも何らかの接点があった人々を対

象化して自からの出発点における課題を明確にすることと、具体的な一歩として、既に発表もしている水泳指導に対する考え方を例示してみることとする。体育教授学として既にグロルらのものがあるが、これは、学校体育を歴史、教授学、方法学、組織の4つの視点から概説しており、1940年代後半からのヨーロッパことにオーストリアを中心にしたものを稲垣が訳出している。<sup>5)</sup>稲垣は、訳出の理由を、わが国でいう『体育科教育学』のひろがり『体育方法学』と『体育科教育学』として今一度論議の俎上にのせたいとしているが、筆者の基本的立場は、グロルと異って学校に限定しない。わが国のこれまでの歴史的制度的体育教育学の最大の欠点は学校体育と社会体育の間に今なお、根強い隔絶を置いているからとも考えているからである。

## Ⅱ. 戦後の実践教授学の席駆者と今日の状況分析

今日的教授学の課題は何であろうかと正面にすえる前に、戦後の実践教授学の分野（ここではせまく授業論とも表現すべきかもしれないが……）で先駆者であった幾人かの人達の足跡をたどってみることとする。それは、先にも述べたが吉本とほぼ年代を同じにして、同じような教育状況下において戦場や立場は、異っていても質的に同じような問題を追求した人々である。その具体的な名を挙げる時、筆者自身とほんの瞬間的なものでも直接的にふれることの出来た人々に限定する。何故なら、その人達の本しか読んでいないし、従って、いくらかの類推をふくらませる事も不可能だからである。こうした前提をおく時、筆者はまず斉藤喜博の名をあげておく。さらには、林竹二およびその両者を取りまいた多くの学者、実践者ならびにこの人達以外にも多数の実践教授学研究者も存在する事は知っているが、これは筆者自身の無知故の偏りである。そして、ここで実践教授学（者）と名称をつけているのは、あくまで、授業実践を介して授業に対する自己の論理を構築した人達であり、それを世に問うた人達をさすのであって、実践と実験を厳に俊別した人達でもある。

以下は、まだ厳密には検討していないが、教育学とりわけ教授学のような分野の研究方法論はまさしく、ケース・スタディーである以外に道はないと考えているし、相当の部分において、教育的現実問題に対して先行的に実践的に解決している少数のケースに対してスポットをあてて、後発的にその解決の理由を説明し意義づけることによって一般の問題解決方策の1つとして提示してまた経過があるように思われる。つまり理論の説明や予測の役割は、問題が生じた後にしか

果たされていないのである。この点は実践教授学の人々は、やや異っている。いつも問題の渦中にいて発言を続けてきた人達なのである。斉藤喜博はその典型的な人といえる。

戦後の実践教授学者の典型としての斉藤喜博にスポットをあてる時、筆者と彼とは直接的には2回しか、それも1回は、単なる研究発表校での見学者として遠目にみただけである。彼は、まさに自からの、あるいは自からが直接指導した教師達の実践を介して、他の教師や父母、教師を志す若者に、教育とは、授業とは何かを常に問い続けた生き様を語り続けた人であり、歌人でもあった。彼が他人に与えた影響度を他の有名人のそれと比較して云々するデータ等ないが、ある意味では、遠山や数教協の水道方式や無着のような教育方針を公表した人達とも異って、特に教職にあった人々によく知られた活動家であったといえよう。彼が鳥小小学校で校長を勤め、その特異的な教師連合をつくっていた頃のエピソードは、戦後も最も教育管理の強行された頃であり、日本の教師達は自からの仕事に自信を失いかけていたとされる。さりとて斉藤は組合活動や生活を守る闘いを否定したのではなく、教師の仕事は何かと問い続けた人だと筆者も考えている。幸いにして、斉藤の実践記録や『教授学研究の会』での資料は保存しており、また小林篤によって、彼の実践なり、生き様がかなり語り継がれており、筆者もいつか機会があれば彼のひととなりや研究してみたいとも考えている。

さて、この斉藤喜博との第1回の出逢いは、鳥取県皆生温泉グランドホテルにおける昭和50年の『教授学研究の会』の8月例会であった。既に生前の彼に出逢ったことは、これが最初で、最後のようなのであるが、筆者としては不本意な出逢い方をしたとの反省がある。先述した小林によって暗に批判されたところでもあり、事の顛末について記憶している限り、本論とは直接関係しないが記載しておく。

筆者が、『教授学研究の会』の8月例会に文句をつけたのは、林竹二の講演の後であったと思う。研究会というからには、発表者とフロアーの間に多少のディスカッションは当然の事と考えていたが、この研究会はほとんど名のうれた人達の講義形式に終止していた。林竹二の講演も4枚の同一少年の顔写真を時間経過を追って撮映されたものが掲示してあり、林竹二は何度かその写真を指さしながら講演した。自身の授業の中で5分程遅刻して教室に入ったその少年の表情がやがて林の授業にひきこまれていったという事を補完するために、プロの写真家がとったというパネル写真は活用されたのである。写真集が出版される程、林竹二と

いう名は知られており、私の在住する福山市では、2台の映写器を使っての講演と見学会があったのも思い出している。

さて、筆者がその形式の研究会にイライラして発言を求め、林の示した4枚のパネル写真に異った解釈も成立しますよと反論した。自分の解釈が、間違っているのは当初から覚悟であったし、林の解釈で間違いないということは感じていたが、これが研究会の名に値するのかと考えた時の腹立しさは今も覚えている。後のディスカッションで決定的なミスを犯し、相当やりこめられたが、当の林竹二は、筆者の発言には笑っておられるところすらあった。組織も大きくなるとずいぶんいろんな人々が関与していると関心した次第でもある。

授業の神様と人にいわしめた斉藤喜博、全国授業行脚を続ける林竹二、いずれも自からの実践をさらけ出して、教師および父母、研究者に語りかけている姿は悲壮ですらある。すさまじい生き様として尊敬しているが、筆者自身は、彼らの信奉者でなければ、神とあがめてもいない。むしろ、この実践教授学の世界もまちがいがなく、例えば向山らにみられるように世代交代は進んでいる。<sup>6)</sup>ただ、両者ともに教育技術のアレコレを例示したかったのではなく、まさしく教師の生き様として、教師のあり方や、学校の役割を訴えようとしたのであって、この事自体は今後にも十分通用し得る普遍度の高いものであろう。従ってわれわれがこのようにして書く紀要論文を『牛のよだれの出るような……わからない文章』として、向山が批判するのも、筆者の場合わからないでもないが、向山らの運動もそれが真に有益であったかどうかは、周囲の人々の活動も含めて後の評価をまたねばなるまい。マニュアルは、便利ではあるが、その便利さが、すべての教育現象に応用しうるとは向山自身も考えてはいるまい。

さて、吉本の研究姿勢も小学校・中学校といった教育現場との共同研究・共同発表のスタイルによくその特徴が現れていた。学習集団論と後のドラマ論は共通する面も多いが、その多い共通面の1つとして、指導者の役割をどう位置づけ、どう機能させるべきかについては、日本の学級教授の歴史をふまえた卓越した考え方をまずあげておかねばならない。さらに、彼の特にドラマ論においては、広島大学伝統のベスタロッツの記述がよく引用されている。そこには、間違いなく一人の教師と何十名かの生徒の相互作用の変化過程が描かれているのではあるが、そしてそこにおける教師の主導性が示唆されているのであるが、その機序を極めて精密にかつ階層的に、かつ一般化して説明しており、十分すぎる程予測的である。『授業の構想力』や『教

育的タクト』論に問題が生じるとすれば、教育システム全体に外圧的・内圧的ゆがみが生じる時であろう。100年に汲ぶ伝統的学級授業は、今多様な側面において、ゆがみを生じる多くの可能性をはらんでいる。その1つの典型的な姿を体育教育学の領域は、既に経験しつつある。確かに学校という公教育をはなれて、私塾や学習塾は、その歴史も古いが、体育でも学校授業では、スイミング・スクールや〇〇教室といったスポーツカルチャーの有償の公的私的事件が非常に多くなっている事と、そのスポーツイベントの内容は、学級授業以上の効率のよさをカンバンにしている。その結果は、予測つくように、20年前には考えられなかった実質能力差の拡大を生じさせている。これは外圧的に生じたゆがみの一つであるし、減少する生徒数に、経済的効率を優先させて学校の統廃合した結果、遠距離通学や教員の配置に一定の原則が、くずれるといったことは内圧的ゆがみの一例といえよう。

確かに吉本に対する批判がない訳けではなく。竹内常一、片岡徳雄らの批判は、授業のうつろいや本質論よりも、成立とその条件をめぐるものだけに、近く本格的に検討する予定ではあるが、刻々と変化し、変化させられつつある教育システムを構成するもの、その構成要素とそれらの特性すらまだ十分に吟味されていないし、一つの吟味をなし終える頃には、他の要素のある側面の性質が変化していて、その変化の方向も矛盾的ですらある。教師や指導者に、指導場面での主導性をもたせるべきという考え方、その機序についての考え方には賛同出来ても、これとて自己矛盾的ですらある。

### Ⅲ. 教授学研究の研究対象と研究方法論

先に、教授学の基本的な研究法はケーススタディーであると書いた。否教育学の研究法それ自体も基本的には、ケーススタディーであり、解釈学的アプローチが主流であったし、今後も多分にこの傾向は続くと考ええる。

従って、先程の林竹二の授業のプロセスを映したパネル写真は、間接的ではあるが小林がふれるように、観察者の目をどうし、カメラレンズをどうした総体としてのデータの意味をもっている。<sup>7)</sup>チェックリストの開発者は、何らかの基準にもとづいて授業プロセスをタイム・スケジュールと分析的手法で、さらには統計的手法までもち込んで客観性を保とうとした経過がある。その一方で授業は生物モノだから、即時的に静観、観察し、即刻その場で失敗や成功の原因——結果、仕組みを解説し、説明、予測できなければ学問としての

意味がないともされる。

こうした客観性や即時性を考える時、一方でいかなるチェックリストを用いようが、いかに反復のきくVTRをみようが、総合的即時的に仕組みを察知しようが、それはすべて、研究主体の感覚——中枢の作用として、判断されるのであり、その判断基準こそが評価なら評価の論理なのである。従って、授業過程や指導過程に即して、それとも実践的に論理を構築しようとするならば、明らかに観察力や鋭敏なる予測——感覚能力とその結果をきちんと明示する概念体系をもたねばならない。

体育教育の世界でいえば、生理学をふまえたガス代謝や体力的諸指標の開発はめまぐるしいが、また競技会に臨んでの精神過程の対策は盛んに議論されても、現実にそのような分析の実験研究によってパフォーマンスを説明しうる程度は、一部の競技を除けば、さして高くない。まして、日常的な授業過程やコーチングプロセスで支配的なのは、教師やコーチの総合的な能力の優劣の差であり、間接的にパフォーマンスの高さや、組織のまとまり、競技成績を支配していることが多い。その際の教師やコーチの総合的実践力は、試行錯誤的な意味での実験ではあっても、コントロール群を設定したような純粋実験ではけっしてない。このような現実理解をする時、プロセスを明確にコントロール出来ない限り、実験群——コントロール群をもうけた比較実験のもたらせる結果は、いかに巧妙なるテストが用いられようと、ほとんど意味をなさない。むしろ研究仮説としての計画指導案に明確な実験仮説が設定されている方が余程重要といえよう。

研究対象として現代体育教授学の性格を規定するならば、現在と将来にわたって、多様に展開されるであろう体育スポーツ場面すべてを考えている。

これまでの現代教授学（授業論）は、目下の対象として授業過程を設定した。広範な研究領域をもち、思想的にも多岐にわたっている。従って、授業評価論も本質規定論も複雑ではあるが、ことこの点に関してはかなり楽観的に考えている。何故なら『いいものはいい』という共通性は必ずあると考えているからである。むしろ、自他ともの実践的経験が、第3者からどのように評価されるかは、実践者にもそのすべては他者に伝達しにくくろうし、実践記録運動に類するものは、過去にも現在にもみられるが、それとて実践者の企図および働きかけのプロセス、実践対象との応答すべてを記憶し記録できる程の自由度をもっていないのがまづ普通である。もしすべてが記録され、またVTRに録画されたとしても、それをすべて同質の情報として程の共通感覚は厳密には保障されない。それ故、方法

論的には枝葉末節はノイズとして大胆にカットし無視している。中村のいう共通感覚は、こと授業論にあてはめれば、枝葉末節をカットした上で『いいものはいい』といわしめる感覚とその情報の総合化の問題であらう。

筆者としては、多くの共通感覚の存在と、さらなるその多様化を前提として、最低限のまさしく共通感覚の中の共通性を吟味することが重要と考える。その中に将来にも連なる諸問題に対して、教師や指導者が独自性を発揮しうる道が開けるであろう。一人や数人の授業の有名人が出る事が重要なのではなくて、そしてその人達が相互を攻撃しあう事の中から現代体育教授学が誕生していくのではなくて、山にも登山ルートはいくつもあり、また開発されていくように、各自の実践と論理が相剋効果を高めていくような組織づくりもまた重要な案件といえよう。

組織論的には、問題追求の組織としてみれば、事を多数決で決定する民主主義(?)より、論と証拠が互いに提示しあえる規模がよい。全国組織・国際組織の権威や時間的経済的効率のよさを評価しないではないが、異質な価値意識と志向性をもちながらも、吉本流に言えば授業の構想力と教育的タクトの質を分離することのない形で議論していける20~30名の規模が適当と考える。

#### IV. 現代体育教授学の構想と展望

筆者が吉本に追従し、その生き様を参考にしながら、体育教授学が、必要だとされる理由については、極めて個人的な理由からも、戦後の若干の人物との接触からも、研究方法論上の理由からも、いくつかの側面についてふれた。その既にふれた事がすべてであるとは思わないが、今改めて現代体育教授学の構想なり、展望についてふれてみる。この点について私論を展開する視点は次の3点に一応限定しておく。

- 1) 吉本が近代と現代を区分した歴史性を、体育教授学ではどう捉えるか。
- 2) 教授学について吉本のいう主たる学問的性格と、それにあえて体育教授学と名称を附すことの理由について。
- 3) 体育教授学の分野で既に先発している小林篤や高田の論理との異同をどう考えるべきか。

これらの諸点については、互いに重複した問題も含むが、現実には人間と体育的営みとの関係をどうおさえていくかという問題にも連鎖するといえる。

#### Ⅳ-1) 現代体育教授学の歴史性

吉本は、教授学思想を人間の発達形式をどうみるから、その区分を行っている。コメニウスからペスタロッチおよびフレーベルに至る近代教授学の巨匠は、人間諸力の可能性を全面的に開発し、調和的に完成させようとすに連続発展の原則にたっているとみなし、その原則を疑って、人間のもつ陶冶可能性の自然成長を問題視した非連続と断絶の論理に立脚した時点で、近代と現代の境目があるとしている。<sup>8)</sup>

教授学思想もさることながら、体育教育学では以下のように考えるべきと思う。この教科は、決定的には身体の鍛練であるとする考え方は、今日なお根強い。敗戦時、体育思想的には身心一元論がとかれ、GHQの指導もあってスポーツを中心としたこの教科は、間もなく体力育成と精神教育に分断れさせている。戦後のカリキュラム運動に参加した体育人も少なくともはなかったが、多くの体育関係者のもつ權威主義的柔順さは、彼らの活動形式の特徴にもよく似ているといつてよい。

そのような背景も考える時、吉本が問題にするように近代と現代の境目の認知の仕方が問題なのではなく、戦後の体育運動史の中で、まさしくその教科の性格と内容が特徴づけられ、また地道な実践教授学の立場からの主張がみられるようになった1950年代を一応のわが国における体育教授学の近代と現代のわかれ目としておく。少なくとも体育という教科で何のために何をこそ教えるべきかの問題意識が芽ばえた時期でもあるのである。従って一部では既になされてもいるが、教育運動としての実践史や思想的点検が将来に通じる歴史的社会的課題として浮上することになる。

#### Ⅳ-2) 現代体育教授学と名を附すことと理由

少なくとも吉本が、現代教授学として著した一連の論文中には、小林一久の記述をはじめ山本貞美らの実践例がよくとりあげられるし、徳永隆治の実践もよくひきあいに出される。山本・徳永ともに実際に見聞した範囲でいえば、広大附属校が誇っている実践研究者であったし、ユニークな教材開発を展開された人であったし、人である。逆説的にいえば、吉本の論理はそのまま体育教育学に通用することを示している。吉本門下の人々でなくとも多くの人が既に、実践的立場より、教授学的発想をしておられるとみなせる例も少なくない。

にもかかわらず、ここに現代体育教授学と名称をつけて、一連の仕事を整理しようとする試みの理由の1つは、体育的にみた人間の成長発達とは何で、それが測定評価学上どのように表示されようとも、また発達心理学的にどのように説明されようとも、動的な教授

＝学習過程の中にあってはほとんど制御上のキーワードになっていないことにある。第2に運動生理学上の諸実験や、技術論、バイオメカニクス等の諸科学がどれだけ分析的に進歩しても、まるごとの人間の運動行為をほとんど説明しておらず、まして授業やコーチングそのものに反映されているは極限られた、それも本当に正しいのかどうかもわからない知識である。それ故、教師もコーチも、科学的成果に余り期待しないし、勉強もしない。第3には、教科別の分担性が目的論において明確に存在するの可否かも目下の時点では明確でなく、一般教授学に登場するのは、運動の達成に関連して、相対的にうまくいっただけの例示であって、発達論や人間形成論への連続性はほとんどない。水泳ならば、泳げたにこしたことはないし、とび箱ならば誰れもがとびこせた方がよい。その事を否定はしないが、むしろそれは最少限学習者に保障されねばならない事項であって、要はその内味の問題なのである。第4には、体育教育学的教育内容に、他の分野と異った特徴がそう多くはないが、決定的に異った側面があることである。体育的運動学習は、必ずしも積み上げ方式だけでもなければ、加算的でもない。発達の加速化現象もみられれば、当初から学校体育で要求することをクリアしている子どももいる。教授過程の展開によって対立や分化がおこるのではなく、多面的であるだけに当初からまるで分裂しているのである。

運動学習の特徴は、他にも色々あげられるが、上記のような点を考えるだけでも、特異的教授学が構想されねばならない理由は十分にある。さしあたって、われわれが整理しなければならない問題は、必ずしも目標——内容——方法の系にそう必要はないが、実践的に十分耐えられる教材モデル群の開発とともに、将来にむけての教授理論の構築であり、同時に歴史的に先人達の仕事を整理し、体系づけていく作業であろうと思われる。

#### Ⅳ-3) 小林の『授業学』や高田の『4原則』の論理との関連

筆者自身今の力と経験で両者ともわたりあえる人ではない。小林は、斉藤喜博を追った人であり、独自に因子分析を用いて開発した体育授業の評価法は、広く活用された人でもある。高田の授業の四原則は余りに有名であるし、小林も時として高田の文章を引用する。

研究方法論として両者をみれば、まさに両者とも偉大なるケーススタディーの実行者であり、解釈学的アプローチと名手として、読者を説得してしまう。ここでもう一度ケーススタディーの意味にふれば、人間の存在形式や活動形式を、アレコレの分析的手

法によって切りきざんで細分化するのではなく、存在形式や活動形式にそって、時には分析的にも総合的にも解釈し、意味づけ記述して、予測していくところに方法論の特徴がある。ケーススタディーの世界は、分析的数量化や比較検討を必ずしも否定しているのでもなければ、排撃しているのでもない。むしろ、測定や実験によって比較し切れるものなら、より説明的であろうと期待する側面もあるし、そのような若干の構想もある。けれども実践の立場にたてば、そのような測定や比較実験がもたらせる結果は、余りに後発的で時間・コストを食う。それでいて、『みておればわかる』以上の情報を必ずしも提供しない。さらに、それ以上に、測定や比較実験は、事実(?)のある側面に限られざるを得ないし、よしんばそれらの諸問題を解決した調査や測定であっても、微妙なバイアスは必然的である。そして、それらの結果が、必ずしも解釈を一元化させず、証明的・記述的ではあっても必ずしも予測的でない。

小林や高田は、ほとんどこのような手法を用いない。むしろ、自からの実践体験と観察体験から事実関係を読みとる。小林がくしくもいうように「すぐれた授業をきちんと見ることが重要だ」という指摘にこのことは典型的にあらわれているといえるだろう。<sup>9)</sup>

こうしてみると、両者はその研究センスや手法を実践活動そのものとともにみがきをかけてきた人達であり、筆者ごときがとてもたちうち出来る人ではない。ただ、割り切ったいい方をすれば、授業にせよ、クラブ活動にせよ、他の指導場面において対峙しあうのは、人間以上のものでもない、またそれ以下のものでもない生物としての人間同士の相互作用の時間経過であるから、どのような時にも双方に期待値があり、義理と人情があり、双方ともに相手に対して計算しうるところはするし、わからない部分は、その場になって相手の反応をみながら、サイバネティカルな相互作用を営んでいく。先人達の努力は、間違いなくこの計算しうる部分を増加させてきているのである。特に教材学や教材学に近い技術論、戦術論は興味深いものが多い。その一方で、つまり未来志向的に計画化しうようになってきた部分を求める一方で、独自の方式の普遍性を求めたり個別性を求めたりするところも否定出来ない。斉藤が『心のモデル』として描く人間像は、人間を情報処理体とみなす人間観以上に、生命体という統合概念とその発育発達やらの運動の位置づけは巧妙に位置づいている。

今さしあたっては、実践体育教授学的には、授業をまず対象として、水泳やサッカーでその具体例を考えながら、そのようなスポーツ文化に直接何時間か接す

ることが生涯スポーツの一貫である等と大げさに考えないで、いつの時代にも社会的にも個人的にも両刃の刀であるスポーツと人間の関係からときほぐしてみたい。

## V. 具体例としての水泳指導の考え方

水泳指導が、例えば学校の体育授業にどう位置づくべきか等ということは、簡単には論じ切れない。プールや海川を近くにもたない学校もけって少なくない。

それでも、この分野には『ドル手』が考慮された歴史もあり、それを受け入れ賛美する研究者も少なくはない。筆者自身、何年間か自からの実践にとり入れながら、最近是指導対象にも、環境条件にもよるが、相当自由に考えるようになった。その一例は既に示しているが、<sup>10)</sup>現時点での考え方を示せば以下になる。

何歳頃から泳法指導に入るべきか、どの善い泳法から入るべきか……このような諸々の問題は、実は本質的な問題ではなく、むしろ許容条件の方に決定因子は強い。けれども、例えば先述した『ドル手』のように呼吸練習が先か、推進力としてのバタ足の練習が先かでは、両方とも大事であるが、どうしても順位をつけなければならないなら『ドル手』のようなパターンではないがもっと動的で実用的な呼吸法の練習法がある。ジャンプ呼吸であるが、そのリズムおよび波長がそのまま泳法につながるという意味で図をつけて説明する。

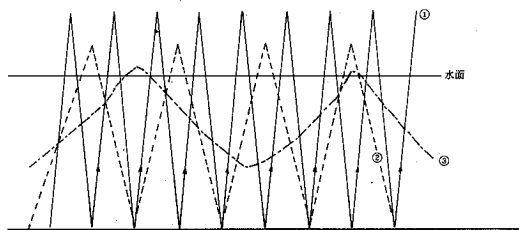


図1 水泳における呼吸練習法の3段階図

(この間に無数のバリエーションを設定することが可能)

この呼吸練習は、既に記しているようにジャンプバタフライにつなぐ。けれどももっと基本的には、限られた年間十時間程度、義務教育課程をわけて100時間にもみえない許容時間であるから、その期間と時間あわせてゴチャマゼの水泳にしないで、何か特徴をもたせようとするかどうかであろう。何故なら既に学習指導要領が示しているような近代泳法の指導は5年から等という基準は、ほとんど無視されているのであるから。

筆者の指導対象の諸特性、許容条件、指導者の考え方、百種類以上は想定される泳法を整理した上で改めて独自の、教師むけの指導方式を考えている。本質的には水が流れるように泳げればいいわけで、もとを正せば水の通る道であるから『水道方式』等と名称づけてみたが、これでは遠山や数教協と同じになってしまうので、『極楽水道方式』とでも名づけておく。相当複雑な組み合わせパターンが考えられるのでパソコンを使うことになろうが詳しくは別にする。

## Ⅵ. まとめにかえて

吉本の個人的な歴史も知らない筆者が、これまたほんの一見の機会しかもたなかった斉藤喜博や林竹二とともに吉本を対比しながら、彼ら相互の交流はどんなものであったろうと考えても推測すら出来ない。しかし、後の小林、高田とともに最大の共通点として、その形式は異っても現場実践を極めて重視した研究姿勢にみる事が出来る。

戦後の日本の教育をリードした、またはしている人としての共通点もあるが、その論理は、またそれぞれに異っている。これまでに記した課題とともに、彼らの論理なり思想の差異を明確にすることも一つの仕事となろう。

10年先の日本が、世相がどうであるかも予測つかないが、人間自体それ程きわだって進化しているわけではない。人間の本質がさ程かわらないとすれば、それなりにアプローチの仕方もあるかと思う。

## 引用参考文献

- 1) 松岡重信：「体育科学習指導の最適化に関する研究(Ⅰ)——体育科教育での最適化の方向性について——」，広島大学教育学部紀要第4部 23号，1974，119-126.
- 2) 松岡重信：「体育科学習指導の最適化に関する研究(Ⅱ)——授業経験差とその授業特性をめぐって——」，広島大学教育学部紀要第4部 26号，1977，143-149.
- 3) 松岡重信：「体育科教育における授業行動の組織化に関する研究(Ⅱ)——授業状況判断研究にかかわる基礎概念の整理——」，日本教科教育学会誌10巻2号，1985，41-48.
- 4) 小林一久編著『達成目標を明にした体育科授業改造入門』 明治図書 1982，その他多くの図書，論文に連名で記述しており，暗に論述の事を示している。
- 5) E.W. ブルガ，H. グロル (1971) (稲垣正浩訳，1981) 『体育の教授学』 不昧堂出版
- 6) 向山洋一らによるシリーズ出版は，既にかかなりの数になり，さらに教育技術法則化運動は，既成の民間研究団体とは少し異った形で，その輪を拡大しているが……。
- 7) 小林篤：『体育の授業分析』，大修館書店，1983，135-138.
- 8) 吉本均：現代教授学』，福村出版，1977，9-14.
- 9) 小林篤：「授業研究」，松田岩男・宇土正彦『現代学校体育大事典』，大修館書店，1973，214-226.
- 10) 松岡重信：「水泳指導体系の総合的検討——特に初心者指導を中心に——」，広島大学教育学部紀要第2部32号，1983，179-188.